

ブリーフィング・メモ

司馬遼太郎『坂の上の雲』と日露戦争—研究者の視点から—

図書館史料室教官 兼

企画室情報発信調整官 菅野直樹

はじめに

司馬遼太郎の長編小説『坂の上の雲』は、1968(昭和43)年4月22日から1972年8月4日まで『サンケイ新聞』(現在『産経新聞』)に連載され、以来、今日までさまざまな形で議論の対象となっている。小説の舞台の1つとなった愛媛県松山市には「坂の上の雲ミュージアム」があり、同館は、松山の街全体をこの小説に因んだフィールドミュージアムとする構想の拠点として活動している。そして11月29日から、『坂の上の雲』がNHK長編ドラマとして放映されることは、周知のとおりである。

歴史小説に対して、一般に歴史研究者はあまり興味を示さないが、『坂の上の雲』は、例外のひとつといてよいかもしい。一例として、成田龍一氏(日本女子大学)が『坂の上の雲』を含め司馬の作品全般を渉猟し、公的世界に活躍するリーダーたちを描くときにも、生活世界に日々を送る人びととの交歓場面等の描写をまじえ人物像を構築する「戦後思想家」としての司馬像をあきらかにしている。このことは、司馬作品が人気をもつ理由の一端でもあるだろう。現代日本のわれわれにとって『坂の上の雲』の内容を学界内外の諸説に照らしつつ検討することは、明治時代のわが国をかえりみる手がかりとなる。

そこで、この小稿では『坂の上の雲』の内容について日露戦争に焦点を当てて、学界内外の考察を参照しつつ検討してみたい。

開戦に至る経緯

1904(明治37)年2月の日露戦争開戦に至る経緯について、『坂の上の雲』の中の一章「開戦へ」は、つぎのように述べている。「ロシアは日本を意識的に死へ追いつめていた。日本を窮鼠にした。(日本は)死力をふるって猫を噛むしか手がなかったであろう。」この司馬の見解に比較して、学界ではどんな指摘がなされているだろうか。

伊藤之雄氏(京都大学)は、従来、ロシアが対日戦争に向かう時期に満州において軍事力を南下させていった論拠とされるロマーノフ『満州に於ける露国の利権外交史』等について、正確に読むとむしろ異なる論述がなされている、と指摘する。ロシアは、一貫して南下の動きをとっていたのではない、というのである。実は、ロシアは、1900年の義和団事件以降、満州に駐兵させていたものの「シベリア鉄道建設に要した膨大な資金を回収するため、シベリア鉄道の安全を、とりわけ満州地域において重視していたが、駐兵のコストが嵩んだことに苦しみ、ロシアの勢力圏をどこまでとし、どのような条件で撤兵するかについて揺れ動いていた」という。千葉功氏(昭和女子大学)も1904年1月末に皇帝ニコライ2世が極東総督アレクセイエフに送った電報を根拠に、ロシアの意向は、満州に軍事力を配置するに留めようとするもので、日本がロシアに対し韓国国土の軍事的使用を認めさせることも充分可能であった、と指摘する。

しかしながら、この皇帝ニコライ2世の電報は、駐日ロシア公使ローゼンに送られることなく、日本は、ロシアとの間に交渉の余地がないと認識し、開戦へと踏み切ることになった。開戦に至る経緯から伺えるのは、日本が戦意をもたないだろうと予測し、日本を軽視していたロシアと、戦局を優位に展開すべく戦争準備を早期に実施した日本のコントラストなのである。

乃木希典の評価

日露戦争中、夥しい死者を出した旅順攻略戦について、「旅順総攻撃」の章は、乃木軍司令部の「無能による日本兵の集団自殺的な死」であり、その原因を「乃木軍司令部の作戦能力の貧困さ」に帰し、痛烈に批判している。

この司馬の描写に対しきびしい評価を下し論駁した人物が、文芸評論家の福田恆存であった。福田は、つぎのように主張している。大本営も満州軍総司令部も堅固な要塞に覆われた旅順の状況を十分に承知していなかったことこそ、第一に責められねばならない。加えて、田村怡与造すでに亡き後の日本陸軍のなかに、要塞攻略に見識を有した者がほとんどいなかったことも災いした。二〇三高地を当初から攻略していれば、かくも凄惨な戦闘にはならなかったという司馬の見解は、旅順の地勢を十分に考慮したものではない。第三軍による攻撃の連続は、旅順に立てこもるロシア側をいちじるしく弱めていた。司馬は、谷寿夫『機密日露戦史』の叙述を論拠とし乃木批判を繰り広げたけれども、当の谷自身は、叙述に際し検討不足であると認識していた。以上の福田による司馬批判の論説から、歴史研究者も学ぶところは多いのである。

乃木のとった戦術に対して、ジョン・スタインバーク氏やブルース・メニング氏といった欧米の軍事史研究者も堅固な要塞、機関銃、自動小銃、速射砲等が登場した旅順攻略戦と第1次世界大戦におけるヴェルダン要塞戦(1916年)の類似性を指摘し、否定的評価をとっていない。

日本海海戦「丁字戦法」の案出

「十七夜」の章によれば、秋山真之は1901(明治34)年頃、入院生活を送る中で海軍大尉小笠原長生から『能島流海賊古法』という兵学書を借り、同書中に記された「長蛇ノ陣」にヒントを得て、日本海海戦の戦法を案出した、という。

ところが、この同じ章の中で、司馬はつぎのような指摘も行っている。すわわち「この当時、日本海軍にあっては、戦術家と自他ともにゆるされている人物は、・・・真之の先輩では島村速雄と山屋他人の二人しかいないとされた。・・・海軍戦術についての日本人の著作物は、山屋他人の書いた簡単なもの以外は一冊もない」と。司馬は、この山屋という人物に言及しない訳にはいかなかったのである。

さて、山屋は、1896年から一時期を除き足かけ3年にわたって、海軍大学校学生として、そして同校教官として、同校校長だった東郷平八郎に仕えている。この山屋こそ、「丁字戦法」を編み出した最初の人物である、と後年、山梨勝之進(元海軍大将)が回想してい

る。日露戦争以前の時期に海軍大学校において、山屋の研究から、戦術研究及び戦史教育に熱心だった東郷が啓発されていたとみることは、自然である。

山屋が案出した戦術は「丁字戦法」ではなく「円戦術」という名称で、単縦陣（たて一列）の陣形、各艦距離を10分の2海里（約370メートル）とする等の内容であった。注目すべきことに、この山屋の構想から、秋山も少なからぬ影響を受けていたのである。山屋の後任として、海軍大学校教官を務めていた秋山は、1902年夏に、海軍上層部に「円戦術」を普及したい意向を山屋に書簡で親しく伝えている。なお、のちに日本海海戦時、山屋は「笠置」艦長を務めた。

日露戦争後の日本のあゆみ

司馬は、1969年10月に『坂の上の雲』第二巻（叢書版）「あとがき」を執筆し、日露戦争後の日本についてつぎのように述べている。「日露戦争を境として日本人の国民的理性が大きく後退して狂躁の昭和期に入る。やがて国家と国民が狂いだして太平洋戦争をやったのけて敗北する」と。この司馬の言について検討してみたい。

故佐藤誠三郎（東京大学）は、日本の政治体制について、明治後半期よりも大正から昭和初期にかけての時期の方が産業化・都市化の進展をとまなつつ自由民主主義により接近していたことを指摘する。帝国在郷軍人会や農村経済更正運動の展開は、こうした中で家族制度や農村共同体の弛緩、解体に対する指導層の危機感のあらわれなのだった。一見「狂躁」にも思える1920年代から陸軍中堅幕僚層が始めた総力戦体制構築への模索も、川田稔氏（名古屋大学）があきらかにしているように、ヨーロッパにおける第1次世界大戦の惨禍に衝撃を受けた永田鉄山等の焦慮から発していたという一面を捨象する訳にはいかない。

加えて佐藤は、太平洋戦争開戦に先立つ1930年代の日本を取り巻いた国際環境について、東アジア地域において秩序を維持しようにも主要諸国間の国際協力がほぼ欠如した状況であったと指摘した。佐藤は、この時期の日本にとっての脅威として、世界恐慌、不平等条約の廃棄と権益の完全回収を実現すべく「革命外交」を呼号した中国の挑戦、急速に増強されたソ連の軍事力の3つを挙げている。こうした1930年代に比較すれば、日本にとって日英同盟の後ろ楯を得て対露戦争を遂行できた時期は、はるかに恵まれた国際環境にあったといえるのである。

なお、中国との間に戦争状態にあった日本が、さらに対米開戦に踏み切るに至った3つの背景として、佐藤は、ナチス・ドイツの興隆、日独伊三国同盟の成立、ヨーロッパにおける第2次世界大戦勃発に続く東アジアでの真空状態の発生を指摘した。以上の諸点を踏まえるなら、「国家と国民が狂いだして」太平洋戦争を遂行するに至ったとする司馬の主張は、あまりに短絡的であるといわなければならない。

おわりに

こうして司馬が『坂の上の雲』に込めた歴史観を学界内外の見解と比較するとき、とく

に司馬の乃木、および昭和戦前期に対する評価から、千葉功氏が指摘するように「経済合理主義による歴史の裁断、ないし単純化という大きな問題性」を見出すことができる。

こうした司馬の限界については、文藝春秋社で、司馬の担当編集者を長く務めた和田宏氏の指摘からもまた別の面を伺うことができる。司馬は、あえて大胆に巷説や風説をもちいて人物像を描写する等「事実から離れる行為」をとることがあった。この点は、日本海海戦「丁字戦法」案出に関する司馬の記載からも確認できることである。読者の側は、注意を要すべきである。

さて、ここまで筆者は、司馬を再三批判してきたが、歴史を後世に伝える手段として、小説という形式それ自体を軽視すべきであると主張しているのではない。読者はときに、小説から登場人物の会話等を通じて、時代の有した一面を如実に知ることができる。たとえば長塚節『土』、横光利一『上海』等は、歴史研究者も大いに学ぶべき小説なのである。

ところで『坂の上の雲』に学界内外の説を照らし検討することで、歴史研究のもつ意義の一端を示すことが出来たように思う。歴史研究は、事実を問い直し、修正を積み重ね、少しでも新しい地平をきりひらこうという営為である。そしてこのことを通じ、わたしたちは、社会観、世界観を事実立脚したたしかなものとし、一層ひろく、深くすることができるのである。

(平成21年10月22日脱稿)

主な参考文献 成田龍一『戦後思想家としての司馬遼太郎』筑摩書房、2009年。伊藤之雄『立憲国家と日露戦争』木鐸社、2000年。千葉功『旧外交の形成』勁草書房、2008年。千葉功「日露戦争の『神話』」、小風秀雅編『アジアの帝国国家 日本の時代史 23』吉川弘文館、2004年。福田恒存「乃木将軍は軍神か愚将か」『中央公論 歴史と人物』1970年。読売新聞取材班『検証 日露戦争』中央公論新社、2005年。野村實『日本海海戦の真実』講談社、1999年。枝栄会編『復刻海軍戦術講義録 海軍中佐山屋他人述』(非売品)2005年。佐藤誠三郎『「死の跳躍」を越えて』千倉書房、2009年。川田稔『浜口雄幸と永田鉄山』講談社、2009年。和田宏『司馬遼太郎という人』文藝春秋、2004年。

本欄は、安全保障問題に関する読者の関心に応えると同時に、防衛研究所に対する理解を深めていただくために設けたものです。御承知のように『ブリーフィング』とは背景説明という意味を持ちますが、複雑な安全保障問題を見ていただく上で本欄が参考となれば幸いです。なお、本欄における見解は防衛研究所を代表するものではありません。

ブリーフィング・メモに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。ただし記事の無断引用はお断りします。

防衛研究所企画室

専用線：8-67-6522、6588

外線：03-3713-5912

FAX：03-3713-6149

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>